

中国における日本語教育

— 現況と展望 —

佐藤雄一

一 はじめに

中国の日本語教育というテーマであるが、具体的には八九年二月から九〇年一月までの間、筆者が吉林大学の日本語科で日本語を教えた体験に基いて述べていくことにする。

大学での日本語教育にふれるまえに、吉林大学をとりまく環境について簡単に説明し、そのあと、中国における教育制度について述べ、そのなかでの大学の位置と日本語教育という形を進めていくことにする。

吉林省は、中国の東北地方に位置し、旧満州であったところである。省都（中国語では省会という）である長春は、満州国の首都新京であったため、旧日本軍の遺構が数多く残っている。

例えば、長春の共産党本部の建物は旧陸軍のもので、城の形をしているし、白求恩（ベチューン）医科大学の建物は満州国の政府関係のもので、国会議事堂そっくりのものもある。吉林大学構内のマンホールのふたには「新京」の文字が刻まれてあり、筆者が住んでいた招待所も日本軍のもので、柱のうえには菊の御紋が刻まれてあった。

このような歴史的背景があるため、東北地方は、中国のなかでも特に日本語学習の盛んなところである。吉林大学のほかに、東北師範大学、長春大学に日本語科があり、吉林農業大学、白求恩医科大学では外国語の授業として日本語が学習されている。また、長春外国語学校では、中学校高校六年間の一貫したカリキュラムで日本語が学習されている。

吉林大学は、以上のように日本語学習が盛んな東北地方にあ

り、文科系、理科系あわせて二〇の学部と一七の研究所をもつ総合大学である。吉林大学での具体的な日本語教育に入るまえに、中国の教育制度とそのなかでの大学の位置ということについて簡単に触れておくことにする。

二 教育制度

小学校は満七歳入学を基本とし、修業年限は、五年制と六年制が併存しているが、都市を中心に六年制への移行が図られている。学令児童の入学率は、一九八七年現在、全国平均九七・二%だが、八六年の統計によれば、全国に未就学児童がまだ三六〇万人以上いる。

また、中途での脱落者も多く、八八年には七三九万人が中退した。全課程を修了するのは、全体の六〇七割である。

わが国の中学校に当たるのが初級中学、高校に当たるのが高級中学である。小学校卒業生の初級中学への進学率は八七年現在で六九・二%、初級中学卒業生の高級中学への進学率は三五・七%である。一九八二年に採択された憲法には初等義務教育の実施を規定し、八五年に出された「教育体制改革に関する決定」では、義務教育の年限を前期中等教育を含む九年間に延長することが決まった。(「八九年中国年鑑」参考)

しかし、この義務教育は完全には実施されていない。さらに義務教育といっても日本のように無償ではなく、学校によって授業料なども異なり、中学への進学率が高い小学校は授業料も高いというのが現状である。

大学は、七七年に統一大学入試が再開された。五七〇万人の受験者にたいして、その四・七%に当たる二七万三〇〇〇人が合格。その後、入学定員は年々増やされ、八五年には六〇万人を越えた。文盲率二〇%といわれる中国にあって、大学生は「超エリート」なのである。

大学の授業料は、無料であるが、学生の生活費は、中国科学技術大学の調査によると、

四〇～六〇元……四四・九%

六〇元以上 ……二四・一%

四〇元以下 ……一七%

となっている。中国の都市住民の月平均生活費は六七・三元、農民は三八・六元であるから、都市に住む学生にとつては、平均以下の生活ということになる。以上の数字は、「八九年中国年鑑」に基くものであるが、実際に学生に話を聞いてみると、一ヶ月に八〇元はかかるということを言っていた。もちろん物価が上がったことを考慮しなければならぬだろう。

また、学生のアルバイトは可能なのだが、アルバイトの口があまり無く、ほとんど親からの仕送りに頼らなければならないため、親の負担もかなりのものであろう。

大学には、授業料無料の学生のほかに、自費生とよばれる授業料を支払わなければならない学生がいる。自費生も全国一斉大学入試を受けなければならないが、合格の最低点が一般の受験生よりも低く設定されている。自費生の授業料は、文科系の大学で年間一二〇〇元、理科系の大学で一五〇〇元となっている。自費生は、卒業後の職業は、自分で決めることができる。

(一般の学生は国家によって「分配」され、必ずしも希望する職業に就けるとは限らない。)自費生の授業料は、大学の財政に組み込まれるため、大学としては自費生が多い方が財政的には楽になるわけである。

このほかに、企業などが大学に委託金を支払って、職員を大学に派遣することも行なわれている。

以上が、中国の教育制度の概要である。次に、吉林大学日本語科の具体的なカリキュラムについて述べることにする。

三 日本語科のカリキュラム

吉林大学のカリキュラムを説明したあと、担当した個々の授業の内容と、その難点および問題点にふれることにする。

大学の新年度は、九月から始まる。吉林大学の場合、入学式は九月で、二、四年生の新学期は八月の四週目から始まる。その年によって多少異なるが、だいたい一月の半ば頃までが前期になる。およそ一ヶ月の冬休みがあり、二月の三週目頃から六月いっぱいまでが後期となる。冬休みの時期は、旧正月の時期によって多少異なる。

授業は、午前七時三〇分から九時二〇分まで、途中に一〇分の休み時間をはさんで二コマ、九時四〇分から一時三〇分まで二コマの計四コマ行なわれる。授業は、二コマ続きで同じ科目が行なわれる。四コマ目は、時間いっぱいまで授業をしていると、学生食堂の食事が品切れになってしまう場合があるために、学生の要望もあり、多少早めに終る。

午後も授業はあるが、午前で終わる日が多い。午後は、習慣として半数ぐらいの学生が昼寝をするようである。

クラス編成は一クラス二〇人前後で、八八年入学の学生は二クラスあるが、そのほかは、一学年一クラスである。

学生の日本語学習歴は大きく三つに分けられる。冒頭でもふれたように、長春外国語学校という、中高一貫の外国語教育機関があり、その卒業生は大学に入学するまでに、すでに六年間日本語を学習している。長春外国語学校の卒業生は一クラスに三、五名ぐらいである。

また、東北地方には朝鮮族が多く、彼らは高等学校で外国語として日本語を学習している。朝鮮語と日本語は文法構造が似ているため、英語よりも学習しやすいからであろう。朝鮮族も一クラスに三、五名ぐらいである。

このほか、大学に入学して初めて日本語を学習する学生もいる。これらの学生のほかにも述べたような、企業から派遣される研修生や、自費生も授業に加わることになる。具体的なカリキュラムは、つぎのとおりである。

〈一年生〉

精読(六) 会話(四) ヒヤリング(四) 範読(二) 現代漢語(二) 法学(二) 中国古典文学史(二) 共産党史(二)

〈二年生〉

精読(八) 会話(四) ヒヤリング(四) 範読(二) 語法(二) 漢語語言学概論(二) 中国社会主义建設(三) ヨーロッパ文学史(二)

〈三年生〉

精読(六) 近代文学史(二) 作文(二) 日本語通論(二)
日本近代文学選(二) 新聞読み(二) 日語読解(二) 第二
外国語(四) マルクス主義原理(三) ヨーロッパ文学史
(二) コンピュータ(二)
〈四年生〉

精読(四) 日本概況(二) 作文(二) 日語古典語法(二)
古典文学史(二) 読解(二) 翻訳(二) 第二外国語(四)
国際関係学(四) 公共関係学(二) 文献探索と利用(二)
※(一)内は、一週間のコマ数。一コマは五〇分

四 授業内容

カリキュラムからもわかるように、日本の大学とはかなり異なっている。一般教養と専門というように別れてはいないし、科目は各自が選択するのではなく決められたものを受講することになる。選択科目というのはあるのだが、それは学期末の試験がないというだけで、ほとんどの学生が全部の選択科目を受けている。(先に示したカリキュラムのなかには選択科目も含まれている。)

また、第二外国語は三年生になってから受講することになる。高校のカリキュラムについては不明であるが、大学三年で初めて英語を学習する学生も多いようである。

会話の授業は、一、二年生で終り三、四年生にはないために、各自がある程度努力しないと、だんだん会話力が落ちてしまいうというこもある。

新聞読みの授業では、一、二ヶ月遅れて送られてくる新聞を教材として利用している。スポーツ欄の相撲の写真にはかなり驚いていたようであった。

マルクス主義原理や中国社会主義建設などの授業には、学生はほとんど興味を示しておらず、受けなくても済むなら受けたくないというような感じであった。

筆者が担当した科目は、精読、文法とヒヤリングである。

精読のテキストは、日本の高校の現代国語の教科書のなかから抜粋したものを吉林大学で再編成したものをつかっている。各単元の終りに新出語句とその意味が書かれており、語句の用法、作文、翻訳などの練習問題も付けられている。一年生のテキストの前半は、基本的な文を用いたオリジナルの文章が掲載されている。

文法(語法)は各学年にあるが、指定されたテキストはない。筆者は、二年生、四年生と大学院生の文法をそれぞれ半期ずつ担当した。大学院生の場合には構文論の理論的なことを取り扱ったが、二年生に対してはとてども理論的なことを説明しても理解できないであろうし、それ以前に、学生としても実際の語の運用に興味があるようだったので、助詞の使い方を中心に授業を行なった。特に、格助詞を取り上げ、個々の格助詞を説明し、練習問題を解くという形で授業を進めた。微妙な使い分けが要求されるものに関しては、例文を多く取り上げて説明を加えた。また、助動詞との関連がある受身表現、使役表現などの使い方も取り扱った。

前期の読解の授業は、毎年一二月に国際交流基金が行なう「日

本語能力検定試験」にむけての準備であつた。この試験は長文読解、文法、ヒヤリングの三つの分野で行なわれる。毎年行なわれているのであるから、当然テキストもあるのだらうと思つていたのだが、無かつた。仕方がなく、日本で市販されている検定試験用の練習問題集を印刷して用いた。

この検定試験は、希望者全員が受けられるというものではない。前年の検定試験の成績によつて受験可能な学生の枠が決定される。前年の成績が良ければ、そのクラスには割り当てが多くなるのである。これは、設備の問題もあつて、ヒヤリングの試験を同時に行なえる人数が限られていることが一つの原因になつているようである。

次に、実際に文法の授業でどのようなことを行なつたか、またそこから得たこと、今後の研究に生かせそうなことなどを述べていくことにする。

助詞を取り扱うに当たつて、避けて通ることができないのは、やはり「は」と「が」の使い分けである。はじめに「は」のはたらきと「が」のはたらきの違いを説明したあと、具体的にどのような表現の違いになるかを例文によつて示した。

例えば、

彼女は迎えに来るのを待っている。

彼女が迎えに来るのを待っている。

というような例文を挙げ、「は」は文末にかかるが「が」は近くにかかるというように説明した。

また、

東京は日本の首都だ。

東京が日本の首都だ。

私は佐藤です。

私が佐藤です。

などの例文を利用して、「は」は題目——説明という表現になり、「が」は述語の主体を明確にすることや、既知の情報につくか未知の情報につくかという違いなど基本的な違いを説明した。そのあとで、どういうときには、必ず「は」が使われ、どういうときに必ず「が」になるかということに限定して練習問題を行なつた。「は」と「が」全体を見渡すことは、とても時間的に不可能であつたし、筆者自身にもそれだけの自信がなかつたので、最低限のことだけにとどめておいた。

個々の例については、なぜ「は」が使われるのか、あるいは逆になぜ「が」でなければならぬのかということの説明はある程度可能なのだが、それを一般化してあらゆる用例を説明し尽くすことは無理であつた。段階的に「は」と「が」の使い分けができるようになるようなカリキュラムができれば、学生にとつても学習しやすくなるだろう。今後の日本語教育の課題であらう。

格助詞の使い分けでは、例えば、

プール（ ）泳ぐ。

プール（ ）端から端まで泳ぐ。

公園（ ）散歩する。

というような例文を用いて「を」と「で」がどのように違うかということを説明した。

次に、「受給表現」について述べよう。この表現は、思ったよ

りも使いこなすのが困難なようであった。「あげる」「もらう」「くれる」、それと関連して「よてあげる」「よてもらう」「よてくれる」という表現を取り扱う際、三人の人間と物を図示して矢印によって物の移動を示し、主語を限定して答えさせるといふ形で練習問題を行なった。

私 ↓ 田中さん

(カメラ)

田中さん ↓ 私

(カメラ)

私 ↑ 田中さん

(カメラ)

このように――部を主語にして、図に示されたことを文章にすることは、それほど困難ではなかったようである。「くれる」という表現は、「受け手」が話者、または話者側に属する人物に限るといふことも理解できたようであった。しかし、実際の会話の場面になるとなかなかスムーズに使えないようであった。筆者が文法の時間に受給表現を取り扱ったあと、別の先生が担当している会話の授業でも受給表現を取り扱ったそうであるが、うまく出来なかったそうである。図によって抽象化されたものを言語によって表現するよりも、実際に発話の場面で現実の関係を理解して抽象化するという過程の方が困難なのであろう。

また、中国語では、この三つの表現は「給」という一つの語だけで表現されるので、それを「くれる」「もらう」「やる」という三つの概念に分けて考えなければならないというところにも、うまく使い分けられない原因があるのかもしれない。

次に、「の」の使い方について。これは、初歩的な間違いとしてよくあるのだが、用言、特に動詞と形容詞の連体修飾に「の」を用いてしまうということがある。

例えば、

行くのとき

美しいの人

というような誤りがある。これは中国語の連体修飾の構造が日本語で表現するさいに影響を及ぼしたのであろう。連体修飾成分を作る際、中国語では、名詞であっても動詞、形容詞であってもその下に「的」を付けて名詞につなげる。名詞に「的」を付けて名詞につなげる場合は、日本語の「の」を用いた連体修飾構造と全く同じになる。

我的書

私の本

中国的学生

中国の学生

さらに中国語では

美丽的人 (美しい人)

去的时候 (行くとき)

というように、日本語では用言の連体形によって連体修飾するのだが、中国語では用言の場合にも(中国語に用言、休言の区別をあてはめるのは適当ではないかもしれないが)「的」を用いて連体修飾成分を作る。

作文などでこのような誤用を指摘すると、すぐに理解するので、文法としては理解しているのであるが、「的」「の」という図式が頭のなかにあつて、無意識のうちにでてきてしまうのかもしれない。「の」と「的」のはたらかに共通性があるために

かえって間違ってしまうのだろう。

次に、共通の媒体として漢字を持っているということからくる誤用についてふれておこう。「あげる」という表現を用いるべきところで「送る」という表現を用いてしまう場合がある。中国語では「送」あるいは「送給」で「ただでやる」という意味になるため、そのまま日本語に翻訳し「送る」と表現してしまうのであろう。

また、学生と話をしている気が付いたことなのだが、「手伝う」という語を用いるべきところで「助ける」という表現がしばしば聞かれた。「手伝う」という表現は中国語では「帮助」となる。これをそのまま日本語に翻訳して用いてしまうのである。

中国語と日本語は、漢字という共通の媒体を持っているという点で、学習者にとつても教える側にとつても利点が多い。単語の意味や微妙なニュアンスの違いを説明する場合、黒板に漢字で書けば理解してもらえやすいことも多い。しかし、漢字は、あくまで異なった言語の表現手段であるということをお忘れたいけないだろう。「文字」は同じであっても、その背景にある言語は全く違うのであるということも、学習者も教える側も認識しておく必要があるだろう。

最後に、分節の違いから起こる誤用を一つ挙げておこう。長春市内には、交通機関として、バスとトロリーバスと路面電車がある。それぞれ中国語では「公共汽車」「無軌電車」「有軌電車」となる。バスと路面電車は問題がないのだが、トロリーバスは中国語では「電車」の範ちゅうにはいってしまうのである。

確かに構造からすれば電車の範ちゅうに入るものであろうが、外見は全くバスと同じであり、ただパンタグラフが付いているかないかの違いである。したがって、感覚的にはバスということになる。 「電車」といえば、レールのうえを鉄の車輪で走るといふイメージがあるので、トロリーバスを「電車」と表現することには抵抗を感じる。この誤用は、初級クラスに多く、なかなかおりにくいようである。

文法の授業に限らず、学生たちは語の使い分けということに非常に関心を示していた。例えば、「 \sim するべき」と「 \sim するはず」の使い分けがある。これらの表現は、中国語ではどちらも「應該」となるため、「はず」と「べき」の混同がしばしば見られる。そのほか理由を表わす「から」と「ので」、条件を表わす「 \sim したら」「 \sim すれば」「 \sim すると」「 \sim するなら」などの使い分けもなかなか難しいようであった。

四 問題点と今後の課題

実際に一年間授業を担当して苦労したのは教材の作成である。精読の授業は、テキストが指定されていたので問題はないのだが、文法は毎時間教材を作成していた。一年の後期から授業を受け持つかたちになったのだが、前任の先生がどんな内容を取り扱っていたのかということは、全くわからない状態だった。テキストがないにしても、少なくとも教材の蓄積ぐらいいは、今後必要だと思ふ。特に、日本人教師は一年契約でほとんどん変わっていくのであるから、お互いの連絡を取ることが不可能

である。授業で使用したプリントや講義ノートのコピーなどをファイルして保存しておくだけでもかなり役に立つと思う。かく言う筆者も、授業で使用したプリントを残してこなかったことを今更ながら後悔しているのであるが。

そのほか、教材作成にあたってコピーが使用できないなどということはある程度仕方のないことではあると思う。コピー機はかなり普及してきているのだが、コストがかかるので、ガリを切って謄写版で印刷して、それを学生に配っていた。このよくなハードの面は徐々に整備されていくことになるだろう。

次に、カリキュラムの長所と短所についてふれよう。先に示したカリキュラムなどからも分かる通り、吉林大学の日本語課程というのは、日本語が使えるようになるというのが大きな目標となっている。そのため、日本語を使うということに関しては、卒業までにかかなりのレベルに達する。日本の大学の外国語学部の卒業生が、どの程度自分の専攻の外国語を使いこなせるのか分からないが、恐らく彼らには及ばないであろう。中国人の先生方が担当している授業も全て原則的には日本語で行なわれる。日本の大学では考えられないことであろう。この点で、吉林大学の日本語教育というのは、かなり高く評価できると思う。

しかし、専門学校や日本語学校ならばこれで十分なのであるが、大学の場合、はたしてこれでもいいのであろうかという疑問がないわけではない。社会体制と、そのなかでの大学の位置ということも深く関わってくる問題であろうが、もう少し各自が自分で問題を見付けだし、自分自身で考えていくという要

素を取り入れていってもいいのではないだろうか。そのためには、科目に選択の幅を持たせるということも必要であろう。クラス単位で与えられた科目を消化していき、四年生になって卒論を書く一時期だけ各自が自分のテーマに取り組むということになる。学生は、自分から問題点を見付けだし、そのことにたいして、自分なりに考えていくことになれていないような感じを受けた。

一番最初に授業を受け持つて感じたことは、なんとなく日本の高校みたいだなという感じであった。学生は、先生のいうことを聞き、テキストに出て来る単語、例文を一生懸命暗記している。大学院生のクラスに行つてはじめて、大学生だなという実感を受けた。ただし、日本の学生よりは一生懸命勉強しているという感じを受けたのも事実である。

次に、資料の問題について述べよう。日本語の研究資料というのは、文学関係にしても日本語関係にしても、多くはない。日本語に関しては、基本的な研究資料はある程度そろっていた。文学関係では、文学全集が一セットのほか、芥川賞受賞作品集、個人の作品集など文学作品は目にするのだが、研究資料というのがあまり無かった。

また、資料室の本は、大学院生は借りることができるのだが、学部生は借りることができないということだった。もちろん図書館の本は借りられるわけだが、日本語で書かれているものは少ないようである。日本に直接注文するということは、予算の面から考えても無理であるため、日本語の書籍や資料は、日本にある様々な機関の援助に頼っているのが現状である。

次に、日本人教師の問題にふれよう。日本人教師は、基本的には一年契約になっているため、大学側は絶えず新しい人材を探さなければならない状態である。もちろん契約更新は可能であるが、長期にわたって日本語を教えるという人は少ないようである。

長春市内で日本語を教えていた教師は、筆者が知っている範囲では、一五名前後であった。このなかには、海外青年協力隊の隊員、県から派遣されてきた高校の教師などいたが、筆者のように全く個人的なルートで日本語を教えるという人も多かった。協力隊や県派遣の場合、二年ごとに新しい教師が交代で派遣されて来るので問題はないのだが、個人的なルートで来ている教師の場合には、ほとんど毎年、大学側が何らかのかたちで後任の新しい教師を探さなければならないという状態で、大学側も人材確保が大変である。日本側に、安定して日本語教師を各国に派遣できるような体制が整うことが望ましいと思う。

教師不足の問題は、日本人に限らない。中国人の教員も不足しているようである。不足しているという表現が適切かどうかは分からないが、実際に教壇に立っている先生が足りないのである。吉林大学の日本語科に籍を置く教員の数は、学生数に対するには十分なはずなのであるが、その半分近くが日本へ留学しているという状態なのである。しかも、留学の期限を過ぎても戻ってこない先生が多いのである。

このために、残っている先生の負担が重くなり、十分な研究もできないという状態のようである。さらに、次に留学する予定

の先生が留学できないという問題も起っている。

この問題は、中国社会が抱える問題にも関わっている。先にも述べたように、中国社会において大学生は超エリートである。しかし、国家はそのエリートをうまく活用できていないように思う。大学生や大学の教員など、いわゆる知識分子と呼ばれる人々を大切にしていない。大学の教員の待遇は、決してよいものではない。研究論文をだそうにも出版社が出してくれない。仕方なく自費出版という形になり、自分で売りさばかなければならないという状況である。これでは、じつくりと腰を据えた研究など出来るはずがない。まずは大学の教員の待遇改善から始めなければならないのではないだろうか。

以上、一年間の体験で感じた問題点を挙げてみた。

六 おわりに

近年、日本語教育に携わりたいという人が増えてきている。しかし、海外で日本語教師を勤めるといふことは、いろいろな面で苦労が多いし、問題点もまだまだある。長期間滞在するには、それなりの覚悟が必要であるし、帰国後の不安も多いと思う。幸い、筆者は大学院を休学していったので、帰国後の受皿という点では何の不安もなかったが、海外青年協力隊の隊員などは、二年間の任期を終えて帰国しても、そこから先の職業の保証は何もないのである。

中国で働く外国人の教師には、大きく二種類の待遇がある。

一つは、専門家と呼ばれる人たちで、一月一五〇〇元程度の給

料と、往復の航空運賃が支給される。もう一つは、外国人教師という肩書きで、給料は一月八〇〇元程度で、往復の運賃は支給されない。外国人教師でも、中国で生活する分には、経済的には全く問題はないが、航空運賃を差し引けば、ほとんど手元に残らない。

吉林大学で、英語を数えていたアメリカ人の教師たちは国からも多少の援助を受けていたようである。彼らが言うには、自分の国の言葉を外国人に教えるということは、その国の人にとってもプラスになるが、自分たちのことを理解してもらおうという点で自国にとっても大変メリットがあるはずだから、国が援助してくれるのは当然であるということだった。

日本も、今後、海外で日本語教育を進めていくのであれば、見習わなければならない考え方はないだろうか。

国内の日本語教育機関にしても、まだ日本語教師が職業として確立していない状態ではないだろうか。

今後、多くの留学生を受け入れることになるのだから、国がしっかりとした体制を整えることに積極的に取り組む必要がある。